第１章　合同歌集 つばき　福島短歌会（昭和六十二年二月八日発行）より

以下、「つばき」の序文（木寺　妙子）を引用します。なお、妙子は、良子の夫・諭吉の姉にあたります。

私達の、「福島短歌会」が、正式に発足してから、満十周年を迎えました。
四季おりおりの生活の中から、生まれた歓びや、悲しみ、を短歌に託しながら、拙い歩みをつづけて参りましたが、この程、誰からともなく、ここらで一冊の本にまとめ、生きた証しにしようではありませんかとの発言があり、早速、私がその労をとることになりました。
かくして、ここに十人の心の願いが叶い、合同歌集「つばき」が誕生したことは誠に御同慶に存じます。
しかし、今日のこの歓びを待たずして、土谷文人氏が亡くなられたことは、ほんとうに残念でありません。
私共は心から土谷氏のご冥福をお祈りすると共に、謹んでこの歌集を、墓前に捧げたいと思います。

合　掌　昭和六十一年十一月吉日

ひぐらし（木寺　良子）

ふるさとの海辺に戻り住む日々にひぐらし鳴くをこの夕べ聞く

ふるさとの海辺の山にひぐらしが鳴くなり夫と耳を澄まして聞く

朝な朝な松葉牡丹は咲きつげり今年まで住む公舎の庭に

秋晴れの海輝きて荷揚げ場の片隅に今日も籾干してあり

浜ぼうの黄色もみぢは海に沿う護岸道路の果てにして燃ゆ

二人きりの夕餉の膳に足るほどの牡蠣打ちをれば霰降り来る

老いづきて二人住む家新しき緑の木の香が冬陽に匂う

裏山の中なる桜咲き出でて梢の花の空に揺らぐも

庭に今樫の若葉の色やさし老眼進みし目を憩いはする

島の町にオーケストラ来てスメタナの「モルダウ」我は初めて聴けり

曼殊沙華時をたがへずわが庭に白きも咲きて彼岸来にけり

わが島の秋の景色も遠来の友もてなさむすべの一つに

少女の頃（東京にて）

母・カヅと妹弟（東京にて）

上野高等女学校時代（東京にて）

時雨降る夕べとなれど友連れて我が住む島を案内し巡る

木蓮の葉の落ち蕾持つ枝のあらはになりて冬に向かふも

寒肥えを庭木に施しゐる夫の汗ばみてをり霜ばれの昼

菜の花の今年は未だ咲かぬまま姑の逝きし日巡り来にけり

医師の前死に近けれど慎みを失はざりし我がしゅうとめは

大宰府の梅見る人の群れの中かざぐるま持つ孫の手を引く

かざぐるま回す風来て大宰府の梅の吹雪を孫と浴びをり

庭すみの桜の若木咲きにけり孫入学に植ゑし記念樹

孫のために精霊バッタ捕らへをり終戦遠く四十年過ぐ

噴煙のなびける阿蘇の中岳に子に連れられて夫と来て立つ

奥阿蘇の田楽の店夏なれど囲炉裏かこめばひぐらしの声

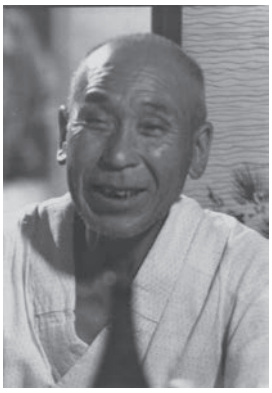
亡き父が偲ばるるなり家跡の隅に残りし紫陽花の咲く

疎開して帰農の父に従ひし母は農婦になりきりて老ゆ

炎天に老母も出でて刈り急ぐ磯田に時折り海からの風

八十路なる母の手作りコロッケを秋の夕べの膳に並ぶる

母・小川カヅ



父・小川政平

祖父母（平吉・タイ）

実家の庭で政平と孫（昌記）

福島小中学校勤務時代（左より３人目は夫となる諭吉）

教え子や同僚の先生方と

実家周辺の最近

実家前の海を望む